

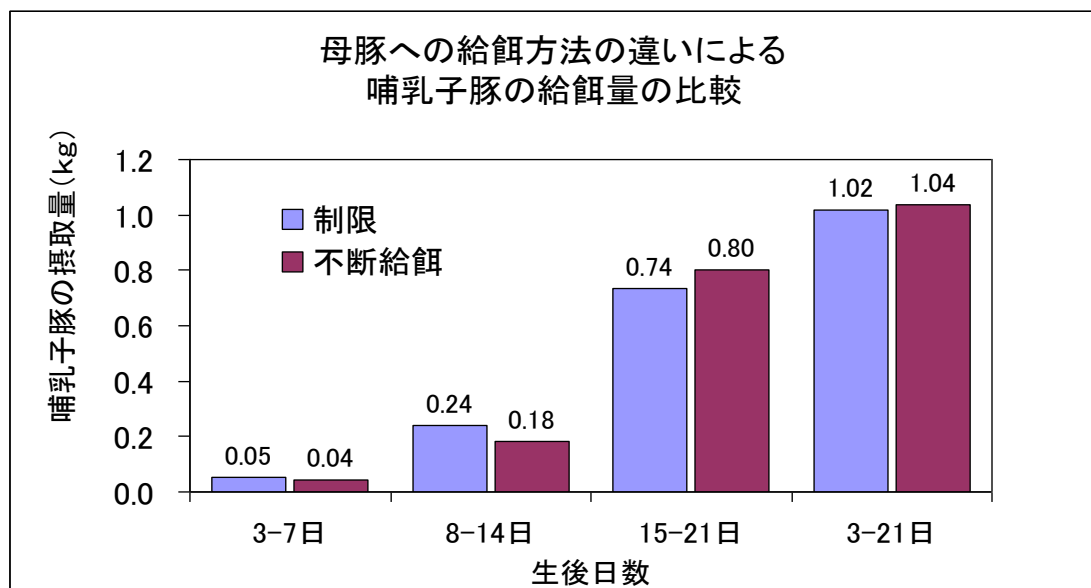
## 哺乳子豚の給餌量、適した給餌器は？

離乳日令は徐々に、特に欧米では動物愛護や生産性向上など色々な理由で延びています。最終的な目的は同じで、農場全体の成績を安定させる為に行われているものです。離乳日令が延びるにしたい母豚は食い込み、体力の回復が出来て良いですが、同時に子豚へも本格的に食い込ませる努力が必要になります。

### 【母豚への給餌方法の違いと哺乳子豚の食い込み】

カンザス州立大学の研究者らは、分娩後の母豚に①不断給餌、②75%の制限給餌の二つの方法が子豚の食い込みにどう影響するかを調べた実験を行いました(下のグラフ)。

母豚の餌が制限されても母乳が減少することはあまりなく、不足分を体の筋肉を削って子豚に与えるという図式は変わりませんでした。子豚も多少食い付きはしますが、ある程度の日令にならなければ食べないことが多く、母豚への制限給餌の有無はあまり関係ありません。アメリカでは一部の生産者間で分娩舎の母豚への不断給餌が試みられていますが、離乳体重を大きくするためというよりも、母豚に必要とされる栄養不足をおこさないように、あるいは次回の繁殖成績を安定させるために応用されていると考えた方が自然です。昨今の育種改良された種畜の場合、産子数が驚くほどです。これをまかなうためにはたくさん



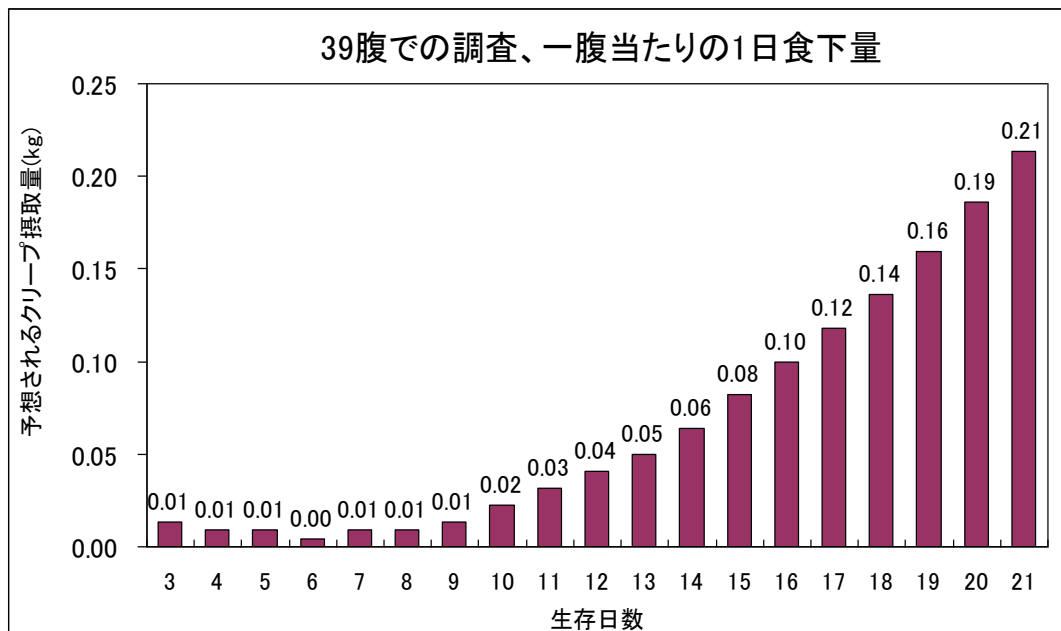
食べる母豚が必要になってくるのです。

### 【哺乳子豚の食い込む量は？】

39 腹の調査で 1 腹当たり食べた量は、グラフのようにそれほど多くはなく、15 日令まではほとんど食べていませんでした。研究者らもようやく食べ始めるのは 13 日令くらいからであり、実際に1日 1 腹 100g程度食べるようになったのは 16 日令を過ぎた頃でした。平均して全頭が食べているわけではありませんが、その消費量のバラツキは大きいと思われます。

離乳までの最後の 1 週間で、ようやく全授乳期間で食べる 72%を食べたことから分かるように授乳期後半の管理が決め手です。目標としている 25 日令になれば 300gまで行くかも知れませんが、より多く

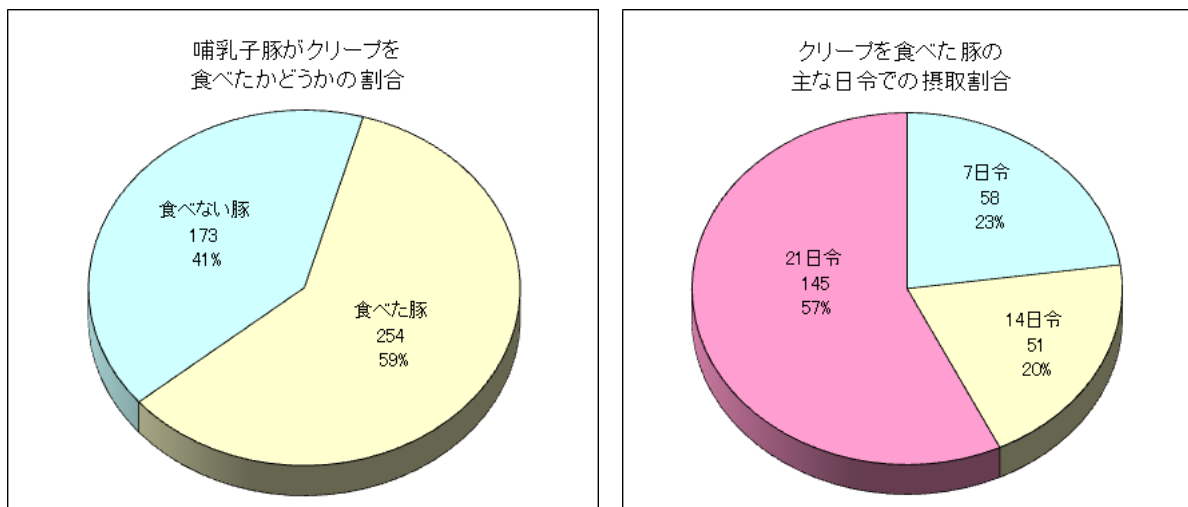
与えられる給餌器を準備する必要があるでしょう。(注意:このグラフはデータから推定された計算式に基づく食下量/腹/日ですので相対的なカーブとして考えてください。また、この食下量の数字は1腹当たりの食下量です。)



日々の管理の努力が生かされないというジレンマはこういうことを言うのかもしれませんが、冷静に考えてみれば当たり前です。母豚は45分から50分間隔で1回授乳し、24時間営業で一番よい母乳を提供している訳ですから、母豚といる限り授乳中も人工乳を食べる豚は例外的な存在と言わざるを得ません。寄り付かないのは当たりまえで、ましてや1日に3~4回の手くれの給餌が人の管理では限界です。「ま、いいか。」とあきらめてしまう豚がいると考えると不思議ではありません。

#### 【本当はいつから食べるのだろうか？】

腹ごとに確かに食べていても、何気なく見過ごしてしまい、本当のところは分からないものです。実際には良く観察していないとピットの下に落としてしまうこともあるでしょうし、個体ごとでも本来かなりの差はあるものです。それを詳しく調べるために、クリープに色素を付けて糞の色が変色すれば食べたという仕組みを利用して丁寧に調べ上げたユニークな試験結果があります(次項円グラフ)。



左上の円グラフは、まず食べたかどうかを見たもので、実に 41%の子豚が食べていないことが分かりました。右上のグラフでは、このクリープを食べていた豚の内、3 つの異なる日令時に実際に食べていたかどうかを調べたものです。7 日令では 23%弱、14 日令では 20%、21 日令つまり離乳日令で 57%が食べていました。たまたまこの日に食べなかった豚もいるかもしれませんが、予想以上に食べない豚がいることにまずビックリしていただけたでしょうか。

その上で、どうしたら食べさせることができるかに真剣に取り組んでいきましょう。子豚がどんどん食べることによって母豚の負担も確実に少なくなるのは間違いないことです。その一つの解決策が哺乳子豚用の給餌器ではないでしょうか。

(ナショナルホッグファーマー2008年1月号の記事・出典)



元気に哺乳用の給餌器に頭を突っ込み、クリープを食べる子豚たち。

3 頭が並んで食べられる構造。餌を鼻でかきあげないように横棒が取り付けられている。餌箱の底には約 8cm のバーが付いていて、床に突き刺す構造。また手前に踏み板があり動かなくなっている。一度にたくさん給餌しないで、こまめに管理するのもポイントです。

## 分娩舎にふさわしい哺乳子豚の給餌器



前頁の写真のように箱型のタイプと円形タイプ(左)、創作ものも含め、沢山の種類が流通しています。統一された規格もありませんので、農場のニーズによく合ったものを選びましょう。

例えば円形といっても中が回るものも、回らないものもありますし、蓋付きのタイプも最近では推奨されています。

### 【生存産子数が多くなった時の別の解決策:ミルクウィーンフィーダー】

欧米で改良されている多産系の母豚を使用している農場は喫緊の課題でしょうが、最近雑誌でも紹介されているミルクウィーンフィーダー(弊社HPでも紹介 <http://www.gpf.co.jp/business/sizai/sizai03.html>)がその一つの解決策です。哺乳期間が20日から25日くらいに延長されつつある昨今、開始頭数(乳頭の数に合わせて子豚数を揃える作業)を大きく越える子数がある場合、里子する母豚がない、そんな時に有効なのがこのフィーダーです。つまり生後数日(推奨は7日令以降)で分娩グループ内の小さい子豚を優先離乳させ、特設ナース小屋(あるいは分娩舎の一角など)で離乳まで管理する。一度に30~50頭の子豚を正規の離乳日令まで管理できる画期的なフィーダーです。EU諸国では20年の歴史があり、手間と時間がかげられる中規模の家族養豚農家で重用されています。母豚と同じように給餌ごとにブザーで子豚を呼び、さらに暖かいリキッドフィードが下皿に出てくる仕組み。体が小さく、よい母乳を得ることが期待できなかった子豚がみるみる元気になり、腹が膨らみ正規の兄弟と遜色なく育つ姿は感動ものです。これによって離乳肥育での生産量を増大させ、結果的に生産コストの低減が期待できます(但し肥育スペースは必要になる)。

きめ細かい管理が得意な日本人なら絶対活用できるシステムと思っています。本論の授乳期後半の給餌は正規の子豚に必要なもので、適切な給餌器の必要性とは別の話です。